國學院大學学術情報リポジトリ

三矢重松の学位論文と折口信夫をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邉, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000651

三矢重松の学位論文と折口信夫をめぐって

渡邉　卓

はじめに

三矢重松は、國學院大學の第一期の卒業生であり、國學院大學で教鞭を二十三年間にわたり執り続け、武田祐吉・折口信夫（釈迢空）の両博士をはじめ、その薫陶を受けたものは数多い。三矢の学問は殊に国語学、国文学において多大なる功績を残しており、折口などによって「国学最後の人」と称されるほどの人物であった。[1] その三矢重松に、國學院大學が文部大臣の認可を経て文学博士の学位を授与したのは大正十二年七月九日のことであった。大正七年十二月公布の大学令により、大正九年四月に大学へ昇格した國學院大學にとって、[2] 三矢は文学博士の第一号となったのである。

この國學院大學第一号の文学博士に対して、この事実を疑わせるような記事が青土社の『現代思想五月臨時増刊総特集折口信夫』[3] に掲載された。それは「私が出会った折口信夫」という岡野弘彦氏に対する安藤礼二氏と富岡多恵子氏によるインタビュー記事における岡野氏の発言である。以下に、少々長くなるが該当部分を引用する。

富岡　「釈迢空」の文学的な継承者は、今、岡野さんしかいらっしゃらないのではないですか。

岡野　短歌をやっている人はいないですね。

富岡　春洋さんの歌集は出ていますが、ずっと歌風を継承されているのは岡野さんだけですね。残された業績の全てを含めた国文学のほうでは折口さんの継承に関してはどうなのでしょう。

岡野　それはないですね。私の先輩でもいないです。三矢先生のことを折口先生は非常に大事にされています。三矢先生の博士論文も折口先生が書いたと言われています。三矢先生が癌に罹っていたので、何とか間に合わせようとして折口先生が書いたようです。

折口先生は柳田さんに対する思いよりは、三矢さんに対する思いのほうが人間的には深いです。柳田さんを知る前からですが、「四天王寺　春の舞楽の人むれに　まだうら若き君を見にけり」という歌を色紙に書いたものを高崎正秀さんが持っています。これは全集には入っていません。恐らく天王寺中学から國學院に来られた三矢さんにはっとした気持が、折口の印象のなかにあったと思います。「まだうら若き君を見にけり」なんて、与謝野晶子のような歌ですね。学問というよりは、国学者としての気迫のようなものに非常に傾倒したのだと思います。（傍線、引用者）

折口にとって三矢は師として特別な存在であり、折口の「自撰年譜」[1]では、旧制中学時代にはじまる三矢との繋がりを回顧している。

明治三十二年（十三歳）

高等小学校三年終了。天王寺中学校に入学。当時、同校教諭三矢重松先生に口頭試問を受けた記憶が深い。
明治三十八年（十九歳）
三月、天王寺中学卒業。六月、第三高等学校第三部志願出頭の前日、急に、東京國學院入学の為、上京。新設の大学部予科一年に入学。（中略）三矢重松先生の恩顧を蒙る様になる。

その他に折口は、三矢歿後に三矢の「源氏物語全講会」を継承したり、三矢の式年祭では祝詞を自ら奏上するほどであった。三矢からの影響は、かなり大きく次のようにも述懐している。[5]

私どもの出ました國學院の大学部と申すところは、予科二年、本科三年の間に、百数十人の先生がお見え下さつたことです。其でつく〴〵、昔の寺子屋風に、一人の先生に、学も行も見て頂きたいと思ひ歎じたことが、幾度だつたか知れません。其中でも、三矢重松先生から授かつた事は、一生感謝しつゞけても御礼が申しきれません。まづ人間にして貰ひました。私は学者であり、又歌人であることよりも、人間らしい考へや行ひが、少しでも出来るやうになつたことを喜んでゐます。

このように折口の師匠三矢重松に対する思いは特別であり、その様子は随所に見て取ることができる。だが、だからといってインタビュー記事で傍線を付したように、三矢の学位論文が折口によって書かれたということは真実であろうか。岡野氏が「書いたといわれています」と述べるところから、折口本人あるいは他の誰かから聞いたか、またはそのようなことが書かれている何かを見たのであろう。また「書いた」という表現は「代作」なのか「代筆」なのか

明らかではない。インタビュー記事であるため、その根拠は明示されていないが、聞き手の富岡氏や安藤氏が改めて問い直していないことからも、折口信夫・釈迢空研究においては自明のことになっているのかもしれない。三矢に対して、いくら中学・大学時代に「学問というよりは、国学者としての気迫のようなものに非常に傾倒し」ていた折口であっても、その傾倒して已まない師匠が余命幾ばくも無いからといって、「文学博士」の学位を取得させたいと「代作」を行い、また三矢もそのような行為を許したであろうか。これは三矢重松と折口信夫という師弟の関係だけでは済まされない重大な違法行為を双方が敢えてし、國學院大學の名誉も毀損する行為といわざるを得ないことになる。もし、岡野氏の発言が事実だとするならば、國學院大學は博士号授与者たる資格を当初から欠いていた大学と見なされても仕方あるまい。

そこで本稿では、三矢重松の学位論文『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』の成立過程と当時の状況を資料から検証し、また折口の言説から、その状況を私なりに確認するものである。

一、博士論文の原形

当時は文学博士の数は少なく、帝国大学以外から学位を授与されることは珍しいことであった。そのため三矢の学位授与は、当然のことながら國學院大學にとっても重大な出来事であり、既に印刷が済んでいた『國學院雑誌』第二十九巻第七号（大正十二年七月）には、急遽、別紙にて彙報記事を挿入し三矢の学位授与を報じている。その彙報には次のようにある。

◎彙報

國學院大學にて授與したる最初の博士。　本學第一期卒業なる三矢重松氏は豫て『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』といふ論文を本學へ提出中なりしが、今回審査委員會及び教授會に於て愼重審査の結果、文學博士の學位を授與すべきものと認め本學より文部大臣に對し授與の認可を申請の處愈認可せられたり、本學卒業生にして學位を獲られたる人には八代國治及山本信哉の両君あれども、本學より學位を授與されたるは實に三矢氏を以て、最初となす、

この彙報が報じるように、すでに八代國治や山本信哉が博士号を授与されていたが、[6] 國學院の卒業生が國學院で授与されたのは三矢が最初であり、同年七月六日に新たなる学位令が交付されたばかりでもあり特筆すべきことなのである。三矢の学位授与については新聞各紙でも取り上げられ広く報じられた。このとき三矢は既に胃癌を患っており、七月十一日の読売新聞では「危篤の三矢氏に國學院最初の博士號を」として次のように報じられている。

國學院大學最初の博士として今度同大學高等師範部長三矢重松氏は文學博士の學位を與へられる事になつた氏は同大學の出身で『源氏物語』研究の権威である提出論文は『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』と題する廣汎なもので氏は昨年来胃癌の爲め高田町一六四三の自宅で療養中で目下危篤の状態にあると（以下略）

國學院大學が授与することと、病状についてこれほどにも詳しく報じられたのである。だが療養むなしく三矢は学位を取得してまもなくの七月十七日に逝去したのであった。十九日の読売新聞には「三矢博士逝く」として次の記事が

ある。

皇典講究所國學院大學教授文學博士三矢重松氏は胃癌で療養中の處十七日夜十一時半死去した享年五十三歳六月『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』を提出して去十日病中文學博士の學位を授けられた（以下略）

この記事から、学位論文の提出は六月に行われていたことがわかる。博士論文の審査報告文は『國學院雑誌』第二十九巻第八号（大正十二年八月）に詳細に記されている。大正十二年七月七日に行われた学位審査は松本愛重、田中義能、山本信哉の三名の文学博士によって行われた。評価と授与についての記事を以下に部分的に引用する。

◎學部教授會　七月七日の日曜を機として三矢教授に學位授與の件に關して神田一ツ橋の學士會に開く。學長より左記の審査報告の説明があり。

審査報告文

記

（略：章立てと内容の説明）

之を要するに本論文は古事記における國語の訓法と漢字の用法とを研究し、著者が深奥なる國語學上の知識を以て古典研究の上に一大光明を投じたるものといふべし。以上の研究は、著者が第五章の總括にも言へるが如く量に於て多からずと雖も参考資料も少く、研究者も多からざる方面に於いて、廣く風土記、萬葉、その他の古典を参照して、此の結果を得たるは學殖と識見とを看るに足るものにして其の學界に貢献することもまた尠からざる

べしと信ず。

以上の理由により著者三矢重松は文學博士の學位を受くべき資格ある者と認む。

大正十二年七月七日　審査員

文學博士　松本愛重

文學博士　田中義能

文學博士　山本信哉

此が議決を求めしに直に可決され此處に本學教授會が生める最初の文學博士を本學第一回の卒業生たる三矢教授に授與することとなつたのは、本學の爲め同氏のため、學界のため、特に祝福せねばならぬ事である、因みに列席者は青木、伊木、今福、河野、筧、金田一、下田、田中、内藤、西田、藤懸、藤村、松本、松井、宮内、宮地、森田、山崎、山本、和田、渡邊、小柳、折口の各教授である。

このように審査ののち、教授会では満場一致で三矢に國學院大學第一号の文学博士を授与することが決議されたのである。しかし、同号の『國學院雑誌』には三矢の訃報記事も掲載されることとなってしまった。

提出された『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』は後に刊行されることとなるが、それによって内容をみると、すべてが書き下ろしではなく原形は既に明治四十三年に発表された論文であることが明白となる。原形は『國學院雑誌』第十六巻第一号から四号（明治四十三年一月～四月）に掲載された「古事記の讀方」および第十六巻第六号から八号（明治四十三年六月～八月）にかけて掲載された「古事記に於ける漢字の用法」という二つの論考であり、これらがまとめられ、学位請求論文となったのである。これは双方を見れば一目瞭然の事実である。このことについて、

三矢歿後に三矢の遺著三巻[7]を弟の静雄と共に編纂した安田喜代門が、昭和六年三月の『國學院雑誌』（第三十七巻第三号）に掲載した「三矢博士著作年譜[8]」のなかで、

「古事記の讀方」と「古事記に於ける漢字の用法」とを合せて補訂せられたのが學位論文「古事記に於ける特殊なる訓法の研究」である。

と特記していることからも、自明の事実である。三矢歿後まもなくして、安田により学位論文の初出論文が明示されているにも関わらず、「折口先生が書いたと言われています。」とされるのにはどのような理由があるのであろうか。

二、古事記に於ける特殊なる訓法の研究

三矢の学位請求論文は、三矢歿後の大正十四年二月九日に同名の『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』として文学社から刊行された。その扉には三矢の自筆とおぼしき手による書名ならびに氏名が印刷されている。口絵には、三矢の肖像、詠草短冊などが用いられ、また巻末には付録として三矢の歌集「楸の舎集」の抄出や、國學院大學教授の鳥野幸次による「三矢重松君傳」が収録される。今この刊行本と初出である「古事記の讀方」ならびに「古事記に於ける漢字の用法」（以下、「讀方」「漢字用法」）とを比較すると、論考の順序の入れ替えなどはあるものの殆ど一致することがわかる。以下に、『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』の目次と、先行する二論の項目とを対応させて掲げる。

『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』

第一章　序説

一　古事記の文體

二　從來の訓點本

三　訓點異同辨

イ　天地初發

ロ　高天原

ハ　成神名

ニ　天御中主之神

ホ　神產巢日神

ヘ　並獨神成坐而隱身也

第二章　語法上の問題　その一

一　接頭敬語「ミ」

イ　用言に附ける「ミ」

ロ　體言に付ける「ミ」

二　「曰ハク云々」

イ　本居翁の說

初出論「讀　方」「漢字用法」

「讀　方」冒頭部

一　總說

二　從來の訓點本

四　卷頭の小節

(1)「天地初發」

(2)「高天原」

(3)「成神名」

(4)「天御中主之神」

(5)「神產巢日神」

(6)「並獨神成坐而隱身也」

「讀　方」三　接頭敬語「み」

(甲)　用言に附ける「ミ」

(乙)　體言に付ける「ミ」

第六　曰はく云々

一　本居翁の說

ロ　飯田武郷氏の説
ハ　兩説の批判
第三章　語法上の問題　その二
時の論
一　概説
二　地の文の時
イ　文末の時
ロ　文の中の時
三　詞の文の時
イ「シ」
ロ「キ」
ハ「ケリ」
第四章　特殊なる漢字
甲　概説
一　同訓異義
二　位置
乙　各論
一「者」の字
二　飯田武郷の説
三　兩説の批評
五「時」に就きて
1　總説
2　地の文
イ　文末
ロ　文の中
3　詞の文
イ「シ」
ロ「キ」
ハ「ケリ」
「漢字用法」冒頭
第一　同訓異義
第二　位置
第三「者」の字

二　「之」の字
三　「所」の字
　イ　實字
　ロ　虛字の正用
　ハ　虛字の誤用
　ニ　被役
　ホ　崇敬
四「矣」の字
五「而」の字
六「是」の字
七「將」の字
八「爲」の字
　イ　將欲に通ずるもの
　ロ　所に通ふもの
　ハ　目的を表す動詞として用ゐたるもの
　ニ　被役の義
　ホ　使役の義
　ヘ　動詞の補助語尾的に用ゐたるもの

第四「之」の字
第五「所」の字
　一　實字
　二　虛字の正用
　三　虛字の誤用
　四　被役
　五　崇敬
第六「矣」の字
第七「而」の字
第八「是」の字
第九「將」の字
第十「爲」の字
　一　將欲に通ずる者
　二　所に通ふ者
　三　目的を表す動詞として
　四　被役の義
　五　使役の義
　六　動詞の補助語尾的に

九「既」の字
イ「全」「一」の義
ロ「速」の義
十　種々の字
イ「更」の字
ロ「然」の字
ハ「那阿」の字
ニ　諸俗字
ホ　諸珍字
第五章　總括

第十一「既」の字
一「全」「一」の義
二「速」の義
第十二　種々の字
一「更」
二「然」
三「那阿」
四　諸俗字
五　諸珍字

このように比較すると、多少の順序の入れ替えはあるものの、前半部が「讀方」、後半部が「漢字用法」で構成されている。また文章そのものを比べると、句読点が増加し全体として読みやすくなっているほか、誤植を訂正したり、年号を明治から大正へ変更するなど提出時期に応じた校正が随所に施されている。また、申請論文としてまとめるにあたって文章を削補したり、用例を増加させたりしている点がみられる。しかしながら、大きな論の流れに変更はなく、『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』は初出となる二本の論と同一といって過言ではない。これら目次からもわかるように、三矢は『古事記』における漢字の訓読をはじめとして、接頭語や時間に冠する助動詞、特殊な用法の漢字について論じている。三矢の論法は、「寛永版本」、度会延佳『鼇頭古事記』、本居宣長『訂正古訓古事記』、村上

忠順『標註古事記』、田中頼庸『校訂古事記』といった諸本・諸説との比較を通して、そこから三矢ならではの国語学に特化した厳密な論証によって考察を加えるものである。三矢が扱ったこれらの問題点は、現在の研究においても議論されている問題であり、三矢の研究は今も色褪せてはいない。

このような目次と内容の一致から、三矢重松の学位論文の原形は、既に明治四十三年にあったのである。だが右の目次と項目の比較によると、第五章の総括のみが対応する初出論がなく、新たに書き下ろされたことになる。第五章の書き出しは、

上の四章に述べたるは、我が思はくの片はしのみ。されどこれにて、古事記に於ける訓讀法の特殊なるものに就きては、略其研究方針の概略を述べたり。いで、茲には云ひ殘しある大體論を述べて、此の論のとぢめと爲さむ。

とあるように、前段までの論を受けて書かれたことは明らかである。刊行された『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』は全九十八頁であるが、殆どを既出論が占め、この第五章はそのうちの約四頁に過ぎない。この僅かな総括ばかりを、仮に三矢以外の人物が書いたとしても「代作」となるであろうか。むしろ、この四頁が三矢によって書かれなかったとすることの方が証明しがたいのではないだろうか。

三、病床の三矢重松

確かに、病床にあった三矢を想像すると執筆活動はままならなかったのではないかと思われる。しかし、亡くなる

大正十二年にも『國學院雑誌』に詠歌を発表しているほか、『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』所収の鳥野幸次「三矢重松君傳」には同年の記事として、

五月二十六日の土曜日には、澁谷の國學院大學校舎に於て、源氏物語の全講會を開き、兼ねて茶話會をも催したり。

とあるように大学へも出講しているのである。三矢の病状は進行しつつあったが、先の読売新聞の記事にもあったように、学位請求論文はあらかじめ六月に提出されていることや、少なからず五月には出校していることからも、論文をまとめるにあたり筆も執れない状況ではなかったと推測される。

三矢は病床にあっても、学問に対する志が失われていないことは、三矢の書簡からも窺い知れる。三矢の書簡をまとめた『菊園書簡集』[9]には次のような書簡が収録されている。

御見舞拝謝例の長いのには感心仕候今日南大曹博士來診不思議腫方引けりと驚かれ候赤樫と鬼の黒焼と食物との効果と存候此分ならば直りさうに候あまり御心配被下間敷候卒業御別の折御話いたし候小生文法論中活用論貴君の組に講授候ひしやもし筆記御持ならば至念御貸與被願間敷候

六月二十日午後　　三矢重松

寺田徹様

この書簡の宛先は三矢の教え子で、大正七年に國學院大學を卒業した寺田徹（第二十六期、大学部国文科）である。『菊園書簡集』には寺田宛の書簡が数通収録されており、三矢と寺田との親交が深かったことがみてとれる。この書簡は三矢に対しての見舞いの返信であるが、その最後で三矢は自分が講義した文法について、筆記を所持していれば至急貸して欲しいと乞うている。この様子からも、三矢は病床にあっても自身の研究について取り纏めようとしていたと推測され、病状が進行しても三矢の学問に対する意志が感じられる。

この他にも三矢の病状と学位授与の経過についての当時の状況を知る資料が残されている。それは、三矢と同郷で親交の深かった教育者の佐藤雄能が、同じく同郷で三矢の門弟であった秋保親孝に宛てた書簡である。この内容の一部が、「沈痛なりし最後と學位受領の經過」として、『国語教室』第二巻第七号[10]（昭和十一年九月）に、その経緯とともにまとめられている[11]。当時の三矢の状況を知る上で重要な資料のため以下に掲げる。

（前略）さて三矢重松氏に關し山口氏（白雲）に詳細御話相成候事昨朝鶴岡日報紙上にて拝見同日三矢氏に持參氏之令弟英松氏に相渡申候。氏は兄は新聞を見居るも何を見居るか分からず氣分の好き折に話すべしと申され候（中略）――（重松）氏は三月（大正十二年）中旬下痢を起しそれより胃腸は本當ならざりし由に候。五月二十四五日頃胃病にて病院に通ひ居る旨通知あり、因て二十七日に見舞に參り候處、昨日も二時間授業したり何曜かに六時間續けて授業したるに疲れたりきなど談られ候へば私は無理なことをすべらからざる旨忠告致し歸り候。其の時胃癌なる事決定し居り候（中略）――それより私は土曜日毎に見舞ひ居りしが、毎日色々愉快げに語られ候ひき。六月下旬私は弟前森の病氣にて大森に參り居り本月（七月）二日夜上京、三日に見舞ひ候處衰弱實に甚しく驚入り候。七日に行きし時は醫師より危篤の宣告を受け、近親に電報を出したり昨日も今日もカンフル

の注射をしたりとの事に候ひき。其日は私も逢ひ候が明朝迄持つものかと思ひし位に候ひき。翌八日朝見舞ひたるところ變りなしとの事に候ひき。十日に行きしに學位授與の通知ありと奥さんの話にて、其の内新聞記者は來る、鳥野氏も到る、間もなく國學院より學位記を持參せられ、三矢氏は御佛様に御覧に入れよと申され候由。私は鳥野氏と一しよに面會したるも只だ有り難うといひしだけに候ひき。其の頃は新聞を見分け候ひき。其の後私は隔日に見舞ひ居り候が十四日に行きし時、英松氏四郎氏も公務上の都合もあれは明日頃出發歸任すべしと話し居られ候。

＊

然るに十六日に行きしに兩氏猶を居り、醫師に相談したるに今二三日模様を見られては如何かと申されし由、昨日は暑くもなかりしが是迄氷を求められしを、それも求めず他の飲物も一切求めぬ事になり、話も學問上の事と自分の事と分らぬやうになれり、併したま〳〵來りし人に逢ふときは緊張するためか間違ひなりと英松氏の話に候ひき昨今は苦痛なしとのことにて、それは仕合に候。随分苦しみ候ことも之ある由に候。學位の方の事は兼て藤井健次郎氏（ママ）（當時京大教授）が色々心配してくれ同大學の新村博士に語りし處同氏は三矢氏ならば至極宜しからんと申されしよし、然るに新に起稿するわけに參らず是迄三矢氏の書きたる論文中『古事記訓法の研究』といふのが宜しからんと新村博士が申されし由。然るに同大學は間もなく休業になりとても早速には取運び難く困り居りたる處、國學院大學にて京都の方にてかく迄いふならば是非こちらにてやらんといふ事になり、文部省にても了解を得、急速に取運びたる由に候。之は偏に國學院の方々、中にも鳥野氏の盡力多大なるものに候。

＊

七月八日の日曜に教授會を開き、二十四人出席せられし由、芳賀博士が第一に演説し誰とかゞ賛成の演説をな

し、滿場一致にて決定し、九日に文部省に提出し、十日に認可を得、其日の夕方學位記を受くるに至り候。其の間諸氏の盡力御推察下さる可く候。私は鳥野氏に感謝したるに同氏は全く三矢氏の學徳の然らしむる處といふものでせうと申居られ候。意識の明確なる際に授與せられ同氏家族の方々は勿論私共に至るまで眞に喜びに堪えざる次第に候。三矢氏は貴下（秋保氏）の御話にもある如く助動詞の研究を論文にする考なりし由なるもその時日之なく六月上旬就床後、病床日誌を自分にてつけ居り何日なりしか寢て以來初めて歌をよみたりとて夜中雨戸をあけ吐瀉すべく起きしに星の輝きを見たといふことをよみたるを示され候ひき（註、この歌は六月二十三日午前一時四十分雨戸より外に吐きてと前書きし「雨戸くり物吐きいだすさ夜中に星みつけたりさみだれの空」といふのである）――源氏物語の講義も何分の一とか終へたりと申され候ひき。今十年も生かし置き其の研究を大成せしめたきに眞に残念のことに候。論文の審査には松本、田中、山内（ママ）（?）の三博士署名し居られ候ひき。氏に三男四女あり、長女次女は高等女學校にて長男は尋常六年の由、昨年生れしもあり何とも氣の毒に堪えざるものに候。六月上旬醫師の話にはこのまゝに行けば三ヶ月位のものならんといひ最も悪く見たる人も二ヶ月といひしに急激に病勢進行したるものに候。先づば右病気の模様と學位受領の纏末とを申上候。時下御自重成さる可く候。

早々

七月十七日

佐藤雄能

秋保親孝様

この『国語教室』に掲載された書簡には七月七日に危篤の宣告を受けたことや、十日に学位授与の通知があったこと

などが克明に記されている。先に引用した、『國學院雜誌』の記事とは多少の食い違いもあるが、おおよそ危篤の宣告を受けたころに、博士号の審査が行われていたことは間違いない。学位授与の知らせに際し、新聞記者や鳥野幸次が訪れ國學院より学位記が届くと、三矢は「御佛様に御覧に入れよと」言ったのであった。このように、危篤にあった三矢が学位記を授与された時の様子が窺われる。

この佐藤と秋保の書簡によると、三矢の学位申請について、はじめは京都帝国大学教授の藤井健治郎や新村出らによって行われようとしていた。そして学位論文の内容は、それまで三矢が書いたもののなかから『古事記訓法の研究』がよろしいと新村が主張していたのであった。しかし、京都大学では時間がかかるため國學院で審査が行われ、三矢は國學院大學第一号の文学博士となったのである。

このように、三矢重松の学位論文『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』の成立過程を検証してくると、明治四十三年の二本の論文をもとにまとめられたことは明確である。確かに刊行された『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』と初出の論文とには差異があるが、内容は紛れもなく三矢重松の論考に基づくものである。したがって既発表の文章を校正し、第五章の「總括」が加筆され学位論文は提出されたのである。

また、三矢が病床にあったとしても、はじめは京都帝国大学に申請の計画があり、内容も『古事記』についてであったことから、学位申請は予てから計画されていたのである。ただ、病状から早急に事を進めなければならなかったことは事実であろう。

三矢の学位論文に関する資料や内容の検討からは、折口が代作したということは言い切れない。学位論文のもととなった論文が執筆・掲載されたとき、折口は國學院大學大学部国文科学生であった。その折口が三矢に成り代わって学位論文を書いたとする可能性はまずないであろう。

四、「先生」の自歌自註

では、癌に罹って死を覚悟していた師のために、折口が二つの論文を急遽編集し校正し、第五章の「総括」を加筆し整えた「代筆」の可能性はあるだろうか。そもそも、三矢の学位論文を折口が書いたとする説は、岡野氏の他にも今日に伝える人もいるようである。[12] これについては、やはり折口の言動から確認するほかあるまい。

ふたたび三矢と折口の関係について検討すると、折口が釈迢空として詠んだ短歌のなかには三矢を詠んだものが幾つかある。折口（釈迢空）の第二歌集である『春のことぶれ』[13]に掲載された「先生」とする十四首も、その一例である。[14]「先生、既に危篤」「先生の死」と三矢の死を前後して、師匠の死に臨んだ折口の心境が詠み込まれている。同書の巻末に付された「製作年表」に、大正十五年一月「先生（内、八首、日光三の一）」、二月「先生（内、六首、日光三の二）」とあり、初出は三矢歿後に短歌雑誌『日光』[15]に二回に亘って掲載されたものであることがわかる。この三矢を詠んだ「先生」には、表題の後に次のような折口の註がある。[16]

亡くなられた三矢重松先生の病気の、いよ〳〵重つた頃、ひとり、箱根堂ケ島の湯に籠つて、先生を記念するための、ある為事に苦しんでゐた。

これによると、三矢が病床にあるときにあって、折口は一人「先生を記念するための、ある為事に苦しんでゐた」のである。詠まれた歌の内容からは、その仕事（為事）を想起させる言葉は見当たらない。この註の表現が、三矢の学位論文と折口とをつなげるものであろうか。

折口は自身の短歌について「自歌自註」として、自歌の作歌背景を解説しているが、『春のことぶれ』所収の「先生」十四首のうち二首にも行っている。『春のことぶれ』の「自歌自註」は、『短歌』創刊号～第一巻第五号（昭和二十九年一～五月発行）に、「『春のことぶれ』自註」と題して発表されたものを初出とする。原稿は口述筆記で、昭和二十八年三月末から、『海やまのあひだ』に続けて行われた。途中、体調を崩して難渋し五月末までかかったとされる。[17] 以下に「先生」の「自歌自註」を引用する。[18]

山川（ガハ）のたぎちを見れば、はろ〴〵に　満ちわかれ行く　音の　かそけさ

夕かげに　色まさり来る山川の　水のおもてを　堪えへて見にけり

大正十二年七月十八日、三矢重松先生が亡くなられた。そのあとさきに、これらの歌の第一稿は出来たのを、十五年になつてまとめたものである。私の若い十九の年から、学生時代、卒業後もずつと厄介をかけつゞけて来た先生である。先生を見送つて翌々日、第一回の沖縄旅行に発つた。其旅の間の心持ちは、今もなほ忘れられないものがある。

これはお亡くなりになる直前に作つたものゝうちで、箱根堂ケ島に籠つてをつた時に出来たものである。それだけ、心に深く持つてゐるものが、歌の上にまできつく現れて、歌が窮屈でもあり又、自然味を欠いたものがうかゞはれる。

堂ケ島の宿の眼の前を、早川の水が止る間なく流れてゐた。激して流れる山川の水。それが、水が豊かに大きなうねりを作つて流れてゆくが、而も眼の及ぶ処までさうして流れて行つて、遠くの方で流れが岐れるのか、音がしんと身に泌むやうに細く聞える。あの時はもっと敬虔な心で、先生を考へながら、先生の原稿の書き直しをし

てゐた。その当時の気持ちが、今見れば表現が不確実で、不要なものが相当につけ加ってゐる気がする。

私の長く仕へて来た先生は、今は物にまぎれて見えなくならうとしてゐられる。山川に向へば、この夕の光線が水に当つて、川水の青みが深くなって来てゐる。その水のおもてから眼を離すまいとしてゐる。眼を離せば、永久に見失ふものゝ如く。

この自註の文は、少し説き過ぎたかも知れない。併しその程度の附加は、歌の意義の中に含まれてよいものと考へて作つたのである。勿論先生のおかげと言つた部分を取り去つても、「色まさり来る山川」が、それに代つて、先生の幻影を作つてくれてゐる。唯、今ならばかういふ歌も、少し人にとゞくやうに作れるだらうと思ふが、何分必要のない技巧の為に、必要な部分もまき込まれてしまふ時代の事である。（傍線部、引用者）

驚くことに「自歌自註」で折口本人が三矢の原稿の書き直しを行っていたと述べている。つまり、これが「ある爲事」と推測され、「先生を記念するため」とは学位申請時期と重なり、これによって折口は「苦しんでゐた」ということになろう。したがって、この「自歌自註」から、折口は三矢論文に何らかの関与があったと考えられる。しかし、折口の「原稿の書き直し」は論文の「代作」ではなく、あくまで「校正」に当たるものである。傍線部に続く「その当時の気持ちが、今見れば表現が不確実で、不要なものが相当につけ加ってゐる気がする。」とは、純粋にみれば短歌の表現に対するものであり、決して三矢の原稿に対しての言及ではないが、全体としてこの折口の「自歌自註」が、やがて三矢の学位論文を「代作」したかのように伝説化していく発端となっているのであろう。ちなみに、口述筆記された「自歌自註」の筆記者は岡野弘彦氏である。岡野氏は、この折口の発言を目の当たりにしており、「折口先生が書いたと言われています」とは、これに拠ると考えられる。あくまでも「書いた」とは、既存の論文を整えた範囲

であり、そうでなければ『國學院雑誌』に三矢が発表した二本の論文と『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』の内容とが一致することを説明できない。だが、初出の論文との差異は折口の筆に拠る可能性も否めない。岡野氏が述べるように「三矢先生が癌に罹っていたので、何とか間に合わせようと」しようとしたかもしれないが、「折口先生が書いた」とは、決して「代作」ではないのである。

おわりに

三矢重松の学位論文『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』の成立を巡る資料や折口の発言などから過程を検証してくると、もとになったのは明治四十三年の二本の論文であり、それを折口が校正した可能性はあるものの、「代作」したということにはならない。「三矢先生の博士論文も折口先生が書いたと言われています。三矢先生が癌に罹っていたので、何とか間に合わせようとして折口先生が書いたようです。」という岡野氏の発言には、「先生」の「自歌自註」を背景とした発言であったのだろう。三矢重松自筆による学位請求論文を実見できていないため、実際に提出された原稿の状態を確認することはできない。しかし、後に刊行された『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』に印刷された筆文字の書名と氏名は、三矢重松自筆とおぼしきものであり、どう見誤っても折口の手によるものではない。むしろ三矢本人の筆でなければ、書名として利用するであろうか。これは、博士論文を三矢が執筆したと考えて良い傍証である。

以上、三矢重松の学位ならびに國學院大學第一号の文学博士に関連する問題を、当時の資料と折口の言説に基づいてみてきた。「折口先生が書いた」とする発言は、得てすると折口が「代作」「代筆」したとも捉えられかねない。た

だし、「代作」ではないものの三矢重松と折口信夫の師弟関係によって、三矢の論文の校正に折口が関わった可能性もあり、三矢の学位論文申請の状況を記した資料には、殆ど折口の名前は見えないことから、病床の三矢を舞台裏で支えたともいえる。後に折口が三矢を回想して、

私の教室でする講義ぶりや表出などを反省して見ましても、亡くなられた恩師三矢重松先生の俤が、あり〳〵自分の内に生きてゐるのに驚かれます。

と述べ[19]、亡くなった三矢への面影を自分と重ねているが、これも三矢への敬愛の現れであろう。そのような三矢を敬愛する折口のとった行動の真意や経緯はいかばかりか、単に折口信夫・釈迢空の伝説に終わらせてしまわないよう、今後は別視点からの更なる考察が期待されるのである。

註

（1）折口信夫「自歌自註」において、『春のことぶれ』所収の短歌「冬草　師の道を　つたふることも絶えゆかむ。我さへに　人を　いとひそめつゝ」に対して「私の師匠三矢重松先生は、言はゞ国学者最後の人であつた。学問と個人の気象と、それの調和した学風を、我々に残してゆかうと、努力して居られたやうだ。それに気のついた時分は、もう胃癌で、命消えようとして居られた。」（傍線、引用者）とある。新版『折口信夫全集』（昭和三十年～平成十四年、中央公論社。以下、『全集』）三十一巻、二八一―二八二頁。また、「国学とは何か」（昭和十二年一月二十日「大阪朝日新聞」掲載、『全集』二十巻所収）において「数年前までは、三矢先生を以て国学最後の人といふ風に考へもし、また書きもしたことがある。」と述べている。

（2）　大学令（勅令第三八八号）によって、法制度上における帝国大学と別種の大学を設置した。大正八年四月一日に施行され、國學院は大正九年の入学式当日である四月十五日、本学は大学令大学の認可を受けた。この入学生より四月入学の制度に改められたのである。ちなみに、この年二月に慶応・早稲田、次いで四月に國學院・明治・法政・中央・日本・同志社の八大学が大学の認可を受けた。

（3）　『現代思想五月臨時増刊　総特集折口信夫』（第四十二巻第七号、平成二十六年四月十五日、青土社）、インタビュー記事は三八―五六頁、引用は四七頁。

（4）　『短歌文学全集　釈迢空篇』（昭和十三年、第一書房）のために、折口自ら編輯したもの。『全集』三十六巻所収。

（5）　折口信夫「去七尺狀」（『短歌研究』第七巻第十二号、昭和十三年十二月）。『全集』二十九巻、二八一頁。

（6）　八代國治は大正十一年十二月二十六日、山本信哉は大正十二年四月二十六日に、ともに東京大学から授与されている。ちなみに三矢に次いで國學院大學にて学位を授与されるのは、昭和六年十月二十七日に植木直一郎（第二号）と河野省三（第三号）である。

（7）　三矢重松の遺著として、安田喜代門・安田静雄共編『文法論と國語學』（昭和七年四月）『國語の新研究』（同年九月）『國文學の新研究』（同年十二月）が中文館書店から刊行されている。

（8）　この年譜は、遺著三巻と別冊刊行予定であった「三矢博士遺著索引」に付録としても掲載されるはずであったが、索引があまりに詳しく分量があり、植字の困難さや資金繰りから刊行されず、昭和九年に日本文学研究会（旧・九州国文学会）の『日本文学』（第四巻第九号～十二号）に索引とあわせて掲載された。のちに安田喜代門が『日本文学』第四巻の抜刷の形で『三矢博士遺著索引』としてまとめている。索引の体裁は遺著と同じであり、刊行予定であったことが窺われる。

（9）　高橋博『菊園書簡集』（昭和二年、源氏物語全講會（國學院大學内））。菊園とは三矢の号である。

（10）　『国語教室』第二巻第七号（昭和十一年九月、文学社）は、「特輯　三矢先生記念號」であり、三矢の故郷である鶴岡市の春日神社境内に建設された歌碑の除幕式が、昭和十一年七月に三矢博士記念会によって執り行われたことに因んでいる。巻頭には、歌碑竣工の折、鶴岡高等女学校講堂において行われた折口の記念講演「三矢先生の学風」が掲載されている（『全集』二十巻所収）。なお記念講演では武田祐吉も「萬葉集の精神」として折口に先立ち講義しているが、『国

語教室』には未掲載である。

(11)　書簡の一部は『国語教室』掲載以前に、地方紙『新荘内』に発表されている。

(12)　拙稿「近代神道史の一齣―三矢重松の学位論文―」前後篇（『神社新報』第三二一四～五号、平成二十六年六月二日・十六日刊）掲載後、数名の方から意見が寄せられた。

(13)　折口信夫『春のことぶれ』（昭和五年、梓書房）。『全集』二十四巻所収。

(14)　『春のことぶれ』には「七月十七日」として三矢の命日を表題とする短歌が三首も掲載されているが、これは三矢五年祭を意味している。『全集』二十四巻、二七〇―二七一頁。

(15)　日光社『日光』。大正十三年四月創刊、昭和二年十二月号をもって終刊となった。古泉千樫・石原純・北原白秋・前田夕暮・土岐善麿・川田順・釈迢空などの同人で構成され、歌壇の大同団結といわれた。折口の「製作年表」には「先生（内、八首、日光三の一）」とあるが、『日光』大正十五年一月号には「先生の死（一）」として八首掲載する。なお、『日光』については高井薫編『四海民蔵〈歌と仕事〉』（昭和五十七年、短歌公論社）に詳しい。

(16)　折口信夫「自歌自註」。短歌の初出である『日光』にも付されるが、若干の文字の異同がある。『全集』三十三巻、四六一頁。

(17)　『全集』三十一巻「解題」、六六九―六七〇頁。

(18)　『全集』三十一巻、二五一―二五二頁。

(19)　折口信夫「新しい國語教育の方角」（『教育論叢』第十三巻第五号、大正十四年五月）。『全集』十二巻所収。

※本稿は、『神社新報』第三二一四～五号（平成二十六年六月二日・十六日刊）に掲載された「近代神道史の一齣―三矢重松の学位論文―」前後篇をもとに加筆・訂正したものである。